

「夜のプラタナス」

作・演出 長谷川孝治

鈴木 孝夫 (五三) 元俳優・随筆家

飯倉 あきら (三三) 姉・お手伝い

もとも (二七) 妹・お手伝い

- 1 -

早春。
書齋。
日暮れ時。

ほぼ四間四方の板張り。舞台の手前に一閑張りの机。四隅に五寸角の柱が天井に伸びている。下手に橋掛かりが伸びて母屋へ至る。上手側には縁側がある。その縁側は廊下状になっていて、トイレと海に続く断崖へ続いている。

上手手前に小さな庭。
舞台奥の壁面は床からびっしりと本が詰まっている。
本棚の上部には大きな本物のカヌー。

その本棚の下には豪華な敷き布団が敷かれてある。

ほぼ能舞台のような舞台。

遠くから船の汽笛。
小鳥の声。

溶明。

鈴木が縁側で足の爪を切っている。

あきら (橋掛をお盆にお茶とスポーツ新聞を載せて入ってくる) お茶と日刊スポーツです。

鈴木 ありがとうございます。

あきら (縁側にお茶と新聞を置きながら) 三枝さんすごいですね。

鈴木 何、人でも殺したの。

あきら ええ。

鈴木 ・・・ホントか？

あきら 犯人の役ですから殺してるんじゃないですか。

鈴木 なんだ、また犯人の役か。

あきら 今度は芝居みたいですけど。

鈴木 (初めて顔を上げて) 芝居？

- 2 -

あきら ええ、新聞にでつかく載ってますよ。

鈴木 ふうーん（ト、爪切りに戻る）。

あきら 晩ご飯、何がいいですか？

鈴木 任せる。

あきら それが一番困るんですよ。

鈴木 あったかいご飯と、みそ汁と、焼き魚。

あきら 魚は何かいいですか？

鈴木 ハタハタ。

あきら そんなのこつちじゃ売ってないですよ。

鈴木 じゃあ、なんでもいいよ。

あきら じゃあ、もとめに適当にみつくり買って貰いますね。

鈴木 なに、もとめさん来るのか？

あきら ええ。

鈴木 何しに。

あきら （立ち上がって）さあ、暇なんじゃないですか。

あきら、上手橋掛かりの向こうに去る。

鈴木は爪を切ってしまうと、新聞を広げてお茶を飲む。

潮騒が遠くから聞こえてくる。

鈴木のナレーション

静かさがやってくると、不安もまたやって来る。不安とは死ぬことではなくて、私がいなくなってしまうからかもしれない。不安とは死ぬことではない。私には「無」を考へることはできない。ないということ考へることは不可能だ。だが、おそらく「無」はやはりあるのだろう。オレは死にたくないのか？そもそもオレとは何を指すのかよくわからない。ああ、そうか、何も指していないのか、それは人称名詞のひとつに過ぎない。オレというのは。

雀のさえずり。

電話（母屋の方から聞こえてくる）。

雀のさえずり。

内線電話。

鈴木 （受話器を取って）……誰？……散歩行ったって（ト、受話器を置く）。

雀のさえずりが続いている。

鈴木、本を開く。

あきらが羊糞を盆に載せて入ってくる。

あきら 到来物ですけど、羊糞切りました。

鈴木 羊糞。

あきら 嫌いでしたっけ。

鈴木 いや、好きだった筈だけど。

あきら 筈？

鈴木 随分長いこと食ってないなあ。

あきら そんな、羊糞ですよ（ト、テーブルの上に置く）。

鈴木 六年、いや一〇年は食ってないんじゃないかな。

あきら 一〇年！

鈴木 そんなに珍しいか。

あきら だって一〇年ですよ。

鈴木 タンポポのサラダだって一〇年は食ってない。

あきら タンポポって……食べられるんですか？

鈴木 うん。

あきら じゃあ今度ここ来る途中で探ってきますよ。

鈴木 ああ、そろそろか（ト、羊糞を一口食べる）。

あきら 春が深くなったら。

鈴木 でも日本のタンポポは食えないんじゃないかな。

鈴木 フランスはどどこで食べたんですか？

あきら それなら大丈夫ですよ。

鈴木 何が。

あきら この辺にあるのは西洋タンポポですから。

鈴木 そういう問題じゃないような気がする。

あきら 大丈夫ですって。

鈴木 もとめさんって、大学生だよな。

あきら いえ、別の大学の二回目の修士の一年、今度二年です。

鈴木 へえ、修士さん。

あきら 二七ですから。

鈴木 あ！さっき死にそうなおじさんそこ通ったから（ト、庭の方を指す）。

あきら またですか。

鈴木 あとでちよつと見てきて。

あきら 面倒臭いなあ。

鈴木 死にそうなら若い綺麗な人だったらオレが行くんだけどさ。

あきら なんてみんなここで死にたがるんですかね。

鈴木 さあ、高さがちよつど痛くなく死ねる高さなんじゃないか？

あきら 鈴木さんその崖、どっかに似てるって言ってましたよね。

鈴木 ああ、ブレスト。

あきら そこ、何処でしたっけ。

鈴木 ドーバー海峡のフランス側、軍港なんだけどさ。

あきら ぐんこう？

鈴木 あのね、海軍の基地がある港。

あきら ああ、軍港。

鈴木 昔、まだ俳優やつてた頃にテレビのドキュメンタリーで、イタリアからフランスまでの教会を旅するって企画があったんだよ。

あきら いいですね、それ。

鈴木 良くないよ、基本的にバスで移動しなきゃなんないって企画だったからさ。八十八カ所。

あきら 八十八カ所ってなんですか？

鈴木 四国巡礼にかけたんだらうな。

あきら 面白いけど・・・馬鹿ですね。

鈴木 人ってどのくらい馬鹿なのか争う時期ってあってさ、歴史とか建築史を巡るんじゃないよ、ただそこへ行くの。

あきら 気合いが入った馬鹿ですね。

鈴木 そう、気合いが入ってたな。だって教会行くでしょ、そうすつと疲れ

あきら てるから椅子に座るわけ。

あきら あの長椅子にですか？

鈴木 そう、疲れ切って何も考えられないんだよ。ディレクター兼カメラマン兼音声さんと二人つきり。ポツンと坐るの。「オマエさ、カメラを

あきら らい回したら」って言うのと口ノ口立ち上がってぞんざいに撮るわけ、

あきら 教会の中を。

あきら 二人。

鈴木 同行二人って、弘法大師じゃなくてその馬鹿な企画考えたヤツと二人

あきら つきり。クソ重い機材担いで。前の日にホテルで「明日どこ行こう

あきら か」って地図広げるんだから。そのくらい計画しとけて世界でさ。

あきら 人生みたいですね。

鈴木 （あきらの顔を見る）。

あきら 生きることに似てます。

鈴木 ・・・そうだったのか。

あきら 私なんて計画できるのは明日の晩ご飯までですから。

鈴木 今のオレはそれすらできないかもな。

あきら それで八十八カ所回ったんですか？

鈴木 回った。

あきら どこが一番良かったですか？

鈴木 最初と最後。

あきら 恋愛みたいですね。

鈴木 恋愛って最初と最後の記憶しか残らないのか？

あきら そうですね。

鈴木 だそうですって。

あきら もとめが言ってました。

鈴木 もとめさんが。

あきら だからいつも最初のように、いつも最後のようにしてるんだって。

あきら 上手の母屋の方から躊躇いがちな呼び鈴の音。

あきら あ、宅急便です。

鈴木 なんで宅急便だってわかるんだ？

あきら 押し方がそうだからです。

鈴木 押し方？

あきら ええ、躊躇いがちですからクロネコさんですね（ト、立ち上がる）。

あきら あきら、下手へ去る。

鈴木 お手伝いさんのプロだな。

あきら

あきら

あきら

あきら

鈴木 あ、死にそうなおじさん（ト、下手の方を見る）。

風が松の木に当たる。
鈴木、本を読む。

鈴木 そうか、そういうことだったのか（ト、独り言）。

あきらが小さな段ボールを持って下手から出てくる。

あきら 当たりました。

鈴木 クロネコ？

あきら ええ。

鈴木 誰から？

あきら （宛名表を見て）電話番号だけです、正確らしいのは。

鈴木 どういう意味。

あきら 北海道青森市なんて地名はないでしょ。

鈴木 どれ。

あきら （荷物を鈴木の上に置く）。

鈴木 （虫メガネで差出人を捜す）。

あきら 何がそういうことだったんですか？

鈴木 え？

あきら さっき言っていました、鈴木さん。

鈴木 え、聞こえてた？

あきら この部屋の、この座卓に向こうから（ト、上手前の橋掛かりを指して）風があっちまで通る道があるらしいんですね（ト、下手奥の橋掛かりを指す）。だから、ひそひそ声で電話してても聞こうと思えば聞けるんです。ある一カ所です。

鈴木 どこだ、それ。

あきら 玄関の上がり框の上。

鈴木 なんか？

あきら この家に精通してるな、オマエ。

鈴木 だって鈴木さんより古いですからね、ここ。

- 7 -

あきら 教えて下さい。私だって風の通り道教えたんですから。

鈴木 小林秀雄って知ってる？

あきら ええ、文芸批評家、本居なんとかって難しい本なら、見たことはありません。

鈴木 その人の「美しい花がある。花の美しさというものはない」っていう言葉の意味がやっと理解できた。

あきら 当たり前じゃないですか。

鈴木 当たり前？

あきら 美しさなんていう抽象的なものは全部具象の中にしかあり得ないです。

鈴木 から。

あきら ・・・あきらさんって何者？

鈴木 結構上物ですよ、ポディーは。

あきら 言うねえ。

鈴木 もとめって、絵描きなんですよ。

あきら うん。え？そうなの？

鈴木 学生でありながらプロの絵描きになっちゃったんです。

鈴木 プロの絵描き。

あきら そのもとめがいつつも言ってるんです。

鈴木 抽象は具象の中にあるって？

あきら 正確には具象の表面にある。

鈴木 ほう。

あきら 展示会のカタログ見ますか？

鈴木 うん、見る見る。

あきら じゃあ後で持ってきます。

鈴木 そうか画学生にしてプロなのか。

あきら 芸術専攻じゃないですよ、もとめは。

鈴木 え？そうじゃないの。

あきら 農学部です。

鈴木 農学部？

あきら はい。

鈴木 農学部で何を勉強してるの？

あきら さあ、遺伝子でも操作してるんじゃないですか。

鈴木 変わってるなあ。

あきら （子機を取り上げ、宛名表を見ながらボタンをプッシュする）。

鈴木 何してるんだ？

- 8 -

あきら 送り主が誰か確かめるんです。

鈴木 いいよ、まだ。

あきら 爆弾かもしれないですから。

鈴木 まさか。

あきら あ、もしもし……。

鈴木 (あきらを凝視する)。

あきら こちら鈴木孝夫の家のもんなんです、あなたは誰ですか。

鈴木 (緊張する)。

あきら ……(じつと聞いて、送り主を見る) 090、日本ですよ。

鈴木 (緊張する)。

あきら あなたは日本人ですか? ……アー・ユー・ジャパニーズ? ……

あきら エス・ク・ヴ・ジャポネ?

鈴木 なんだ?

あきら フランス語に聞こえるんです。

鈴木 フランス語喋れるのか?

あきら 一応。

鈴木 一応って、なんか余裕を感じるね。

あきら (電話に向かって) すいません、日本語で話していただけますか?

鈴木 ちょっと代わって。

あきら (受話器を鈴木に渡す)。

鈴木 もしもし、電話代わりました。私、鈴木と申します……はい、はい。え、三枝がですか。

間

鈴木 ああ、そうなんです。それはどうもありがとうございます。あつたかいご飯と大根のみそ汁ですね、わかりました。有り難く頂戴致します。三枝はまだそっちに……ああ、わかりました。それではこれで失礼致します。ごめんください(受話器を置く)。

あきら フランス人でした?

鈴木 青森の人だよ。

あきら 青森。

鈴木 三枝がロケの途中で送ったんだってさ。

あきら 何をですか?

鈴木 筋子。

あきら 筋子?

鈴木 うん。

あきら はー(ト、段ボールを見つめ)、青森の人ってフランス語話してるんですか?

鈴木 んなわきやないでしょ。話してるのは津軽弁。

あきら 津軽弁って、フランス語なんですか?

鈴木 オマエって面白いな。

あきら なんです?

鈴木 面白いヤツって、自分の面白さに大体は気が付いてないんだよ。

あきら え?

鈴木 まあ、いや。あつたかいご飯、すぐに炊ける?

あきら いますぐですか?

鈴木 うん。

あきら それは可能ですけど、半端な時間ですよ。

鈴木 食べたい時が旨い時なんだから。

あきら わかりました。

鈴木 それから大根ある?

あきら たぶんあると思います。

鈴木 じゃあさ、それを千六本にして、油揚げ入れてみそ汁作ってくれるか?

あきら 随分はつきりした要求なんです。

鈴木 明日死ぬかもしれない、今日を生きている人間なんだからさ、多少の傲慢さは許してくれてもいいんじゃないか?

あきら (立ちながら) そんな死ぬ死ぬって言ってるホントに死んじやいますよ。

鈴木 あのね、人の死亡率は一〇〇パーセントなんだよ。

あきら それは正しい考えです。

鈴木 正しいっていうか、当たり前だろ。

あきら 常識ってことですね。

鈴木 おまえって、ホント面白いな。

あきら ありがとうございます。

鈴木 どういたしまして。

あきら 鈴木さんってなんで津軽弁のヒアリングができるんですか?

鈴木 ばあちゃんが弘前の人なんだよ。

あきら かつこいいい。

鈴木 弘前はかっこいいのか？
あきら だってあの字で弘前って読むんですよ。

あきら、橋掛かりに去る。

鈴木 不思議なヤツだな・・・あ、さっきのおじさん。

間。

鈴木 仕方ねえか。

鈴木、上手の橋掛かりへ去る。

潮騒。

風の音。

あきら、下手橋掛かりから走って来る。

あきら ああ、肝心な時にいないんだから・・・（しばらく胸を押さえて動悸がおさまるのを待って）。ゴキブリがいたんですよ（ト、下手橋掛かりへ去る）。

潮騒。

風の音。

母屋で電話の鳴る音。

鈴木が上手の橋掛かりから出てくる。

鈴木 （煙草に火を付ける）。

間。

あきら （右手にしゃもじを持って、下手橋掛かりから走って出てくる）。

鈴木 どうした？

あきら ゴキブリがいたんです。

鈴木 ふーん。

あきら それだけです（ト、下手橋掛かりへ走り去ろうとする）。

鈴木 だからどうしたんだ？ああ、あきらさん！

あきら （立ち止まって）はい。

鈴木 さっきのおじさんだけど。

あきら ああ、死にそうなおじさん。

鈴木 そっちの窓から見たら、崖の上から小便してた。

あきら 小便。

鈴木 だから大丈夫だと思うよ。

あきら なんで大丈夫なんですか？

鈴木 死ぬ前に小便はしないだろ。

あきら わざわざ小便しにここまで来ますかね。

鈴木 ・・・それもそうだな。

あきら 後で見えます。

鈴木 うん。

あきら あんな崖から落ちたら痛いでしょうにね。

鈴木 痛いだろうな・・・うん、ソートー痛いだろ。

あきら 痛いのは好きなんですけどね。

鈴木 ・・・誰が？

あきら あたしです。

鈴木 痛いのが好き。

あきら ええ、大好きなんです歯医者。

鈴木 ・・・変わってるな。

あきら 嫌いなんですか？歯医者。

鈴木 嫌いだよ。あんなとこ好きなヤツなんかいるか？

あきら チクつとすると命に触られてるような気がしませんか？

鈴木 しない。大体、命ってどこにあるんだ？

あきら そりゃ全身ですよ。全身命！なんです。

鈴木 断言するか。

あきら 断言するしかありませんね。命に関しては。

鈴木 命が全身にある・・・そうだよな、全身にないと困るよな。

あきら でしょ。

鈴木 おお、全身命。

あきら あ、ご飯！ご飯！

あきら、下手橋掛かりへ去る。

庭からもとめが顔を出す。

もとめ こんにちは。
 鈴木 ・ ・ ・ びっくりした。
 もとめ ごめんなさい。おどかすつもりはなかったんです。
 鈴木 こっちも驚くつもりはなかったよ ・ ・ ・ 背後からなんて反則だよ。
 もとめ すいません、崖の方から上がってきたんです。
 鈴木 あの狭い階段？
 もとめ ええ、好きなんですよ。
 鈴木 変なおじさんいなかった？
 もとめ いえ、誰もいませんでしたけど。
 鈴木 海の中にも？
 もとめ あ、海の中は見てませんね。どうかなさったんですか？
 鈴木 ここ崖さ。
 もとめ ええ。
 鈴木 もとめさんが昇ってきた階段と反対っかわに自殺の名所があるんだよ。
 もとめ そうなんですか。
 鈴木 死にたくなるような場所なんだな、多分。
 もとめ 後で行ってみようかな？
 鈴木 死んでみたいの？
 もとめ いや、まだその欲求はないですね。
 鈴木 あれは欲求なのか？
 もとめ 姉さんは。
 鈴木 今、ご飯焚いて貰ってる。
 もとめ 今からですか？
 鈴木 青森から三枝が筋子送ってくれたんだ。
 もとめ 筋子って何の卵ですか？
 鈴木 鱒の卵を一腹ばらさないで塩漬けにするんだけど、その塩漬けの具合が絶妙だとあったかいご飯に乗せたときに溶けるんだよ、微妙に。そこが旨いんだ。
 もとめ イクラじゃ駄目なんですか？
 鈴木 婆ちゃんが弘前の生まれでさ、向こうの人は鮭よりも鱒、イクラよりも筋子なんだな。
 もとめ へー、どうしてですか。
 鈴木 しょっぱい物が好きなの。
 もとめ 血圧上がりそうですね。
 鈴木 婆ちゃんに味噌汁の塩分濃度図る機械をあげたことがあったんだけど

- 13 -

もとめ さ。
 鈴木 はい。
 鈴木 体温計みたいなヤツを味噌汁に入れるのよ。
 もとめ あー、想像できます。
 鈴木 当然、弘前人だから味付けが濃いよ。
 もとめ ええ。
 鈴木 塩分濃度がどんどん上がるわけだ。
 もとめ (口の中で舌を動かして、しょっぱそうなる顔をする)。
 鈴木 これはちよっとヤバいんじゃないって、お湯をつぎ足すわけだ。
 もとめ はいはい。
 鈴木 で、その味噌汁を「あべけね、あべけね」って言いながら全部飲んじやうの。
 もとめ 結局塩分摂取量は同じですね、それって。
 鈴木 そうなんだよ。
 もとめ でも「あべけね」ってなんなんですか？
 鈴木 塩梅が「けねえ」ってことだな。
 もとめ けねえって？
 鈴木 頼りない、弱々しい、がっしりしてないってこと。
 もとめ けねえー。
 鈴木 アクセントは最初の「け」にあんの、だからけねえー。
 もとめ *あははは。
 鈴木 あははは。
 もとめ あははは。
 鈴木 あははは。
 鈴木 あははは。
 *下手橋掛かりからあきらが出てくる。
 あきら 何、二人して笑ってるんですか。
 もとめ 津軽弁の発音直して貰ってたの。
 あきら 発音練習。
 もとめ けねえー。
 あきら 何、それ。
 もとめ がっしりしていない味のこと。
 あきら けねえー。

- 14 -

鈴木 お、上手いじゃない。

あきら 上手いですか。

鈴木 弘前行っても大丈夫だよ。

あきら アンタ、いつ来たの。

もとめ ついさつき。

あきら どっから。

もとめ 階段上がってきた。

あきら ああ、崖の反対っかわ。

もとめ そう、あそこ途中で猫が住んでるの。

あきら 猫が住む？

もとめ うん。

あきら 普通猫って住むの？そこいらへんにいるんじゃないの。

もとめ 洞窟に住んでるんです。

あきら 洞窟なんてありません。

鈴木 いや、見たことないな。

もとめ 有名ですよ、ここの洞窟は。プラトンの洞窟のアイデアってこっからだ

って言われてますから。

間。

風。

あきら すいません。コイツたまにしょうもないこと言ってますよ。

もとめ しょうもないかな。

あきら じゃ、何。猫が洞窟の奥の壁を見ながら、まるでアイデアの影のような

ものを見る訳？

もとめ 猫って影に敏感だからね。

あきら 理性の光ってさ、どっから来るの？

もとめ 夕日。

あきら 洞窟の前をアイデアが通るんでしょ。

もとめ そうね。

あきら それは見てもいいかな。

もとめ でしょ。

鈴木 シュールだな。

もとめ 何がですか。

鈴木 おまえさんたちの会話。

もとめ *そうですか？

あきら *そうですか？

鈴木 ほら、その言い方もそっくりだし。

あきら アンタ、筋子食べる？

もとめ いいねって(ト、鈴木に)お呼ばれしてもいいんですか？

鈴木 構わないですよ。

あきら 今、早炊きしてるから。

もとめ 谷中安規(たになかやすのり)って知ってる？

あきら うん、大正時代の版画家よね。

もとめ あの人の版画みたいな洞窟なんだよ、そこ。

あきら へー。

もとめ そこに茶トラのでっかい猫が住んでるの。

あきら でっかい猫か、じゃあ住んでるんだらうね。

鈴木 大きい小さいで住む住まないって決まるのか、猫は。

あきら そうですよ、だって猫の喧嘩って年寄りの方が絶対に勝つんですから。

もとめ そうそう。

あきら 何事にも形式っていうものがあるんです。

もとめ (最初に猫の鳴き声を入れて) オマエの年はいくつなんだあー。

あきら (最初に猫の鳴き声を入れて) 三歳と六ヶ月だあ。

もとめ (最初に猫の鳴き声を入れて) なんだ、おれは八歳と七ヶ月だぞお。

あきら (最初に猫の鳴き声を入れて) お見それいたしやしたあ。

もとめ (最初に猫の鳴き声を入れて) 仕方がねえ、今回は見過ごしてやる。

あきら (最初に猫の鳴き声を入れて) 恩に着ます。

鈴木 君たちはいつもそうなの？

あきら え？

鈴木 そんな会話してるの？

あきら ええ、なんか変ですか？

鈴木 . . .

あきら (もとめに) お茶買ってきてくれた？

もとめ うん(ト、鞆をこそそする)。

あきら お魚は間に合わなかったなあ。

もとめ あ、駅前の市場においしそうな金目鯛があったから買ってきたわよ。

あきら あら、気が利くじゃない。

もとめ なんか夕べ姉さんが言ってたの思い出して。

あきら さすがは我が妹。

もとめ あたしも食べたかったから。
あきら なんだ。お湯持ってくる。

あきら、下手橋掛かりへ来る。
以下、もとめが買ってきたお茶を茶筒へ入れ、お茶を入れる準備をしながら。

鈴木 茶トラの猫。

もとめ ええ。

鈴木 どのくらいでかいの？

もとめ 十キ口は越えてるんじゃないでしょうかね、抱いた感じ。

鈴木 十キ口。

もとめ ええ。

鈴木 それは猫じゃないんじゃないか。

もとめ いや、猫ですね、あれは。

鈴木 それよりも君は十キ口なんて持ち上げられるのか？

もとめ ええ、それが限界ですからよくわかるんです。

鈴木 十キ口越えた猫って、それは狸とかを指すんじゃないか？アライグマとか。

もとめ 猫です。ニヤーって泣きましたから。

鈴木 洞窟に住んでる猫か・・・なんかいいね。猫って夏には一番涼しいところを知ってるし、冬には一番あったかいところにすぐまってるよね。

もとめ 彼らは自己保存欲の塊ですから。次に街へ降りてくるのはいつですか？

鈴木 いつがいい。

もとめ あたしは・・・ずっと待ってます。

鈴木 わかった。

潮騒。
風の音。
鈴木、本に視線を落とす。

もとめ 静物画ってありますよね。

鈴木 え？うん。

もとめ あれって、新鮮なものがだんだん死んでいくのを追いかけて描く

んですよ。

鈴木 だって、オマエは肖像だってそうやって描いてるじゃないか。

もとめ 鈴木さんのだけです。

鈴木 ……

もとめ 埃をかむってるキャンパスは痛いんです。

鈴木 ……

もとめ 痛いんです。あなたの何もまだ知らないっていうのは。

鈴木 オレもオレしてものをまだ知らないから。

もとめ 嘘です。

鈴木 自分の生き死にだから、嘘はないはずだよ。

もとめ 病院へは行かないんですか？

鈴木 行かない。

もとめ 何故。

鈴木 わからない、行きたくないんだ。

もとめ 行ってください。

鈴木 行かない。

もとめ 鈴木さんは死を経験した時にはもういません、でも私はその後もずっといるんですよ。

鈴木 これはオレの物なんだよ。

もとめ 私のもでもあります。

あきら、下手橋掛かりからポットを持って出てくる。

あきら もとめ、アンタ、ゴキブリ、(ト、いったん言葉を切る)平気よね。

もとめ 変なところで言葉を止めないでよ、あたしがゴキブリみたいじゃない。

あきら ちょっと殺してくんないかな。

もとめ いいわよ、どこ？

あきら たぶん冷蔵庫の下あたりを基地にしてるみたい。

もとめ 卵がびっちりか。

あきら やめよ、そういう話。

もとめ 言い出したのは姉さんでしょ。

鈴木 止めよ、その卵の話は。

もとめ 嫌ですか？

鈴木 何かがびっしりとかたまってるって言うのが嫌なんだよ。

もとめ 筋子もそうですよ。

あきら 羊糞、残しておけばよかったですね。

鈴木 そうだな。

あきら あと二〇分でできます。

鈴木 ありがとう。

あきら (お茶の準備をしながら) ヲエネツィアの話、さっき大根切りながら考えてたんですけど、鈴木さんまだ本にしてないですよね。

鈴木 ああ、してない。

あきら 書いてみませんか。

鈴木 うーん。

あきら 絶対に面白いはずですよ。

もとめ 何? ヲエネツィアって。

あきら 若い頃に鈴木さん、教会建築八十八カ所巡りってやったんですって。

もとめ 八十八カ所?

あきら 行き当たりばつたりの旅。

もとめ で、ヲエネツィアはなんなんですか?

あきら 出発地ですよ。

鈴木 うん。

あきら そつからフランスのプレストまでバスで移動したんですって。

鈴木 それから汽車。

もとめ いいですね。

あきら それが良くなかったんだって。

もとめ だって、ヲエネツィアでしょ、官能的じゃないですか。

あきら あー、もとめは行ってるモンね。

鈴木 あ、そうなの。

もとめ ええ。

あきら いいんですよ。

もとめ 車が走ってないっていうのはそれだけで価値がある。

あきら 沈んじやう前に行ってみたいな。

もとめ じゃあ急がないと。

あきら そんなにヤバいの?

もとめ 地球に聞いてみなきゃわかんないけどね。

あきら そうか。

潮騒。
間。

- 19 -

あきら いいなあ、二人とも。

鈴木 もとめさん、ヲエネツィアには何時頃に着いた?

もとめ ええと、夜の十時過ぎです。

鈴木 マルコ・ポーロ空港に?

もとめ ええ。

鈴木 それから水上タクシーで入ったの?

もとめ ええ。

鈴木 ホテルまで。

もとめ そうです。

あきら アンタ、半年くらいいたんじゃない?

もとめ 八ヶ月。

あきら そんなだったっけ。

鈴木 八ヶ月か、それじゃ旅行者じゃないね。

もとめ 私はどこに行っても旅行者みたいなもんですから。

あきら そうよねこの世だって旅してるもんね。

もとめ そう見える。

あきら (いきなり立って) やっぱり、羊糞持ってくる。

あきら、下手橋掛かりへ去る。

あきらの姿が見えなくなると、すぐにもとめ立ち上がったって鈴木の所に行き、上から鈴木を見下ろすくらいまで近づく。

鈴木 (上を見上げて) どうした?

もとめ (鈴木の手を取り、自分のスカートの奥深くその手を入れて座り込む)。
不自然な体勢のまま、しばらくじっとしている。

鷲の鳴き声。

鈴木 崖下に住んでる鷲の声だ。

もとめ

鈴木

もとめ 街にはいつ降りてくるんですか?

- 20 -

鈴木 . . .

下手の袖からあきらの声が聞こえる。

あきら (袖中で) もとめえー、出番よおー、ゴキブリ出たあー。

もとめ、立ち上がって足早に下手橋掛かりに去る。

風の音。

潮騒。

鈴木

(元の姿勢に戻って)。(ナレーション)あきらともとめという姉妹は、この家に附属していた。正確にはこの家を借りる前提として、お手伝いに二人を雇うことが条件だったのである。それがどんな理由によるのかは詳しくは知らない。ただ、私も独り者だったし、はなから身の回りの世話をしてくれる人を探する必要もあつたことは事実である。昨年の春、私はここを終の棲家と決めた。

姉のあきは毎日、妹のもとめはたまに家に来て掃除・洗濯・ご飯の支度・私の身の回り一切の世話をしていた。朝は六時に街からこの崖の上にある家に出てきて、夜はその日の仕事の一切が終わる九時頃まで家の世話をしている。家の世話。そう、姉妹は私の世話というよりも家の世話をしているのかもしれない。

この家は街からというよりも海からよく見える。いつだったか、戯れに漁船に乗せて貰って沖に出たことがあるが、この家は海の青さと崖の土色、そして崖の上の緑に白く、まるで灯台のようにしてうずくまっていた。

最近私は身辺雑記しか書かない。何故、そのように決めたのかというと。どれほど原理的にかつ論理的に世界を記述したところで、それは客観という名の主観でしかない気がついたからである。「これは客観であると判断している主観」私にはそれしかないのだ。

下手から菜っ切り包丁を持って、あきらが出てくる。

鈴木 どうした?ゴキブリ。

あきら (下手の方をうかがったままで)今、もとめが闘ってます。

鈴木 ゴキブリと?

あきら ええ。

鈴木 ああいうのは闘いとは言わないんじゃないか?

あきら じゃあなんて言えばいいんです?

鈴木 麦踏み。

あきら 先生、麦なんて踏んだことあるんですか?

鈴木 いや、ない。

あきら 実践を伴わない理論はクロネコ・シロネコの区別無く悪いことだって毛さんが言ってますよ。

鈴木 誰だ、毛さんって。

あきら (下手をうかがったままで)昔、もとめは「けざわあずま」さんって読んでましたけどね。

鈴木 けざわあずま、なんだ毛沢東か。

あきら そんなことはどうでもいいですから、お気持ちがあれば先生、もとめを手伝ってやってくれませんか。

鈴木 お気持ちはないよ。

あきら そうだろうと思ってました。

鈴木 ちよっとダルいんだよ、今朝から。

あきら 癌ですもんね。

鈴木 そう、癌だから。

ガラガラドッシャーンという食器や鍋釜がひっくり返る大きな音。
潮騒。

間。

潮騒。

あきら 終わったようですね。

鈴木 いや、あれは始まりの合図だったんじゃないか。

あきら はー。

鈴木 ちよっと見えてきて。

あきら (以外と素直に)はい。

あきら、下手へ行く。

鈴木 (あきらの背に)ゴキブリに菜っ切り包丁はいらないだろ。

あきら (下手を向いたまま手で鈴木の発言を制して)わかってます。

鈴木 わかってまっせんで、あんたは。

鈴木 (ナレーション) 胃を全摘するとき、医者は私にこう言った「開いて

みて、どうしようもなかったら何もしないで閉じますから」私の癌は見えない癌である。癌にも色々なキャラクターがあるのは、人の性癖と同じで、奥の奥の奥の方に裏も表もない塊があるのだから。

あきら (下手から走り込んできて、報告したらすぐにまた戻る) もとめが先生の大事にしていたウェッジウッドのティーポット壊しました。

鈴木 (ナレーション) 運がいいのかどうかは知らないが、私の胃は全摘された。麻酔から覚めると医者は開口一番私にこう言った「おめでとうございます。全摘です、他の臓器への転移は認められませんでした」それは誰にとつてめでたいのか、私はその医者に感謝すべきかどうかしばらく考えてみた。

もとめ (下手から走り込んできて、報告したらすぐにまた戻る) 姉さんが先生の大事にしていた蚤の市で買ったアンティークの銀の匙を排水溝に入れちゃいました。

鈴木 (ナレーション) 人間の死亡率は一〇〇パーセントである。生まれ落ちた瞬間から死に向かって生きているのだが、誰もがそのことはとらええないものとして生きている。自分は死なない、死ぬのはいつでも他人ばかりで、私は明日のことはとらええず明日考えながら生きていた。

あきら (下手から走り込んできて、報告したらすぐにまた戻る) もとめが先生の

楽しみにしていた五年ものの三輪素麺を床にばらまいてます。

鈴木 (ナレーション) 医者から胃を全摘しましたと聞かされたとき、私には

ずっと気持ち悪いなと感じていた風景がやってきた。例えば、どこかの国の空港でもいい。長いイミグレーションの手続きが終わってタクシーに乗る。発車してしばらくすると必ず茫洋と殺伐とした風景が広がる。何かの作物を作っているのでも、工場の敷地を整備しているのでもない、何のために使われていない土地。そんな途方もない無気力な感じ。

もとめ (下手から走り込んできて、報告したらすぐにまた戻る) 姉さんがウ

スターソースでゴキブリを殺しました。

生まれた瞬間からずっと死に続けているのが私で、死はぼんやりと生きようがはっきりと生きようがどうせいつかはやってくる。命は全身にあると言ったあきらさんの言い方がずっとこびりついて離れない。命は全身にある。だとしたら、胃を切除した分だけ命は少なくなっただろうか。いや、そもそも命は目方や面積なのだろうか。

鈴木、天体望遠鏡の方へ行き、覗く。

もとめ、お盆に薬袋と水を入れたコップを持って下手から入ってくる。

もとめ 昼はこの三種類でいいんですか。

鈴木 (覗きながら) うん。

もとめ でも、全然減ってませんね。

鈴木 で、台所はどうなってるの？

もとめ なんとかなりました。

鈴木 ゴキブリは死んだか。

もとめ 逃げていきました。

鈴木 逃げた。

もとめ 飛んで。

鈴木 飛ぶんだよな、あいつら。

もとめ 私、オブラート、探せなくて。

鈴木 いい、苦さも旨さだから。

鈴木、薬袋からひとつ取り出す。

もとめ 苦さが旨さなんですか？

鈴木 透き通った味ってあるでしょう？

もとめ はい。

鈴木 清涼飲料水かなんかで。

もとめ ええ。

鈴木 あれは見た目でね、本当の透き通った味っていうのは山菜にしかない

んです。コゴミとかミズとかタラの芽とかね。

もとめ はい。

鈴木 山菜の味をここに出してみてください。

もとめ 味ですか。

鈴木 はい。

もとめ 言葉でいいんですか？

鈴木 それならなお結構です。

もとめ 焼けたプラスチックの・・・匂い。

鈴木 それは置き換えただけでしよう。

もとめ そうでした、すいません。

鈴木 置換は初歩です。

もとめ え？

鈴木 物思フ窓ニブラリト糸瓜（ヘチマ）裁ってね。

もとめ え？

鈴木 （すうーっと薬を口に入れる）。

もとめ （コップを差し出す）。

鈴木 （水を飲んで）お腹が空きました。

もとめ もうじき炊きあがりです。

鈴木 胃はもうないんですけど、お腹は空くんですね。

もとめ （立ち上がって）今すぐ。

鈴木 （望遠鏡をのぞき込んで）すいません。

もとめ もとめ、鈴木を見ている。

鈴木 （覗きながら）どうしました？

もとめ なんでもないです。

鈴木 何か、言いたいですか？

もとめ いえ（ト、踵を返して下手へ向かうが、声には出さないで次のように

言う）あんまり多すぎて言葉を選べません。

鈴木 そこを切り取るって、何か、命を切り取ることですね、たぶん。

もとめ （振り返って）はい？

もとめ 鷹が鋭く啼く。

鈴木 あ、あれかおまえさんが見た猫って。

もとめ ちょっとすいません（ト、双眼鏡をのぞき込む）。

あきら、下手から入ってきて、鈴木ともとめを見ている。

もとめ あ、あれです！

鈴木 がかいな。

もとめ でしょ、十キロですから。

鈴木 ホントに猫か。

- 25 -

あきら、思い立って下手へ引込む。

もとめ あ、もう一匹。あれもがかいなあ。

鈴木 どれどれ（ト、代わる）。

もとめ 決闘ですかね。

鈴木 うわ、がかいなあ。

もとめ ちょっと貸してください（ト、双眼鏡を取り返す）。

あきら、オペラグラスを持って出てくる。

あきら （オペラグラスを覗いて）あ、忠太郎。

鈴木 忠太郎？

あきら 夏になると海の家を出す山崎さんご存じですか？

鈴木 うん、海岸通りのお百姓さんだろ。

あきら あすこの忠太郎ですよ。本名は違うみたいですけど。

鈴木 本名なんてあるのか。

あきら 頭中将（とうのちゆうじょう）って言うらしいんですけどね。

もとめ *すごい名前。

鈴木 *源氏のライバルか、名前負けしてるんじゃないか？（ト、もとめ

に）ちょっといいか？

もとめ あ、立った。

あきら *立った。

鈴木 え？

もとめ 仁義切ってるの？あれ。

あきら ま、そうね。

もとめ 姉さんどっち応援するの？

あきら そりゃ忠太郎だわね。

もとめ じゃあ私はイデアの茶トラ。どのくらいあんの？忠太郎。

あきら 忠太郎も十キロ近いんじゃないかな。

もとめ いい勝負ですねえ。

鈴木 （あきらに）ちょっといいか？

あきら あ、両者裂帛（れっぱく）の気合い！

もとめ にかー！

あきら にかー！

あきら

- 26 -

間

あきら あ、額が切れたんじやない。

もとめ 切れた切れた。

鈴木 え、何、額？

あきら 頑張れチュウ！

もとめ でも茶トラも苦しそう。

あきら 腹に一発入ってんじやない？

もとめ お！

鈴木 え？

もとめ 両者ならみ合っております。この静寂さが独特の緊張感をかもしだしております。

あきら 春浅き断崖絶壁。南風が二匹の頬を切り裂いて参ります。

鈴木 (二人の間でそわそわしている)。

もとめ 猫でも先手必勝なのかな。

あきら 当然そうなるんじやない。

もとめ じゃあ、さっきのは引き分け？

あきら そうなるね。

鈴木 引き分け？

もとめ 両者ゆっくりと円を描き始めました。

鈴木 うん。

あきら 視線を外したら負けだよチュウ、そっちじゃない右、右だつて。

もとめ そう！そこでフーしなさい！フー！

鈴木 フー？

もとめ 怒るんですよ。

あきら この静寂がたまりませんね。鈴木さん、猫つかえりって知ってますか？

鈴木 うん、知ってる。あれだろ、背中から落としても空中で身をよじって

足から着地するやつ。

あきら 前に忠太郎で実験したことがあるんですよ。

鈴木 うん。

あきら 五十センチの高さから落としたら背中から落ちました。

鈴木 うん。

あきら 一メートルの高さでも背中からでした。

鈴木 うん。

あきら 二メートルの高さでも背中でした。

鈴木 うん。

あきら さすがにちよつと咳き込みましたけどね。

鈴木 ニメートルは痛いよ。

あきら 次に二階の屋根から……。

もとめ 落としたの？

あきら いや、思いとどまった。

鈴木 *よかった。

もとめ *良識が勝ったのね。

あきら 長いな。

もとめ ほんと。

鈴木 何が。

もとめ 間合いです。

鈴木 間合いか。

あきら あ、忠太郎の口から血が出てない？

もとめ え・・・あ、出てる。

あきら 動かん。

もとめ 寝てるのかな。

あきら まさか。

もとめ だつて、両方ともうずくまって目え閉じてるじやない。

あきら (鈴木に)見ますか？

鈴木 見る見る

あきら はい。

鈴木 おー(ト、オペラグラスを覗く)。

もとめ 寝てますよね。

鈴木 *ちよつと待って。

あきら *寝てないって。精神統一してるだけ。

もとめ 精神統一？

あきら うん。

もとめ そうかなあ。

あきら 絶対にそうだつて。

もとめ 精神統一してるうちに寝ちゃったんだ。

あきら それはないよ。

鈴木 そうかもしれない。

もとめ だって、猫だよ。
あきら どういうこと？

もとめ 猫は自分のことを猫だって自覚できないよね。
あきら うん。

もとめ 握り拳作って爪舐めてる時も。これは猫の手であるって自覚してないわけですよ。

鈴 木 それはさすがに荷が重いよ。

もとめ だから自覚してないものは貸せない。

鈴 木 はは、面白いな。

もとめ なんかも面白いと言いましたっけ。

鈴 木 いや、猫は絶対に手を貸してくれない。

もとめ *あ！

鈴 木 *お！

あきら (鈴木からオペラグラスを奪い取る) お、お！

もとめ なんかも一個の毛玉になってる。

鈴 木 (身を乗り出して) え？え？

あきら ひるむなチューー！

もとめ 行け行け！

間

鈴 木 ど、どうした？

あきら 忠太郎の耳、とれかかってんじやない？

もとめ ほんとだ。大丈夫かな。

鈴 木 大丈夫、猫って半分くらいはまた生えて来るから。

もとめ 嘘ですよ。

鈴 木 さすがに首なんかは生えてこないけど、末端部分は生えてくるよ、結構。

もとめ 茶トラのダメージも相当みたい。

あきら 忠太郎の下からの猫キツクがあったから、内臓に来てるかもしれない。

もとめ 腎臓とか。

あきら うん。

もとめ すい臓とか。

あきら 猫にすい臓なんかあったっけ。

鈴 木 あるに決まってるだろ。

あきら え、すい臓炎の猫ってあんまり見ませんよ。
鈴 木 見なくてもあるの、ほ乳類なんだから。

台所の方(下手)からご飯の炊きあがった音楽が聞こえる。

もとめ ごはんできた。

あきら うん。

もとめ 猫の喧嘩って一瞬なのね。

鈴 木 え、勝負がついたのか？

あきら (オペラグラスを鈴木に渡して) あったかいご飯に筋子でしたよね。
鈴 木 うん。

あきら、下手へ去る。

遠くから船の汽笛。

潮騒。

鶯の声。

もとめ (双眼鏡を見たままで) 船の汽笛と潮騒と鶯がセットなんですな。

鈴 木 (オペラグラスを見たままで) 風の塩梅がいいってぺんに来ます。

もとめ 春がどんどん来てますね。

鈴 木 お日様に力が戻って来る。

もとめ 歯にぶつかる風も温くなります。

鈴 木 海の匂いも強くなる。

もとめ 春は危ない季節です。

鈴 木 残酷だしな。

あきら (下手の奥から) もとめえ、ちょっといいかなあ。

母屋で電話が鳴る。

遅れて子機が鳴る。

あきら (奥から) あ、先生、お願いできます。

鈴 木 (オペラグラスを覗いたままで、子機を取る) はい、鈴木です。

もとめ (首から双眼鏡を提げたままで) 今、行く。

もとめ、下手へ去る。

鈴木 なんだ、切れてるよ。

遠くで飛行機が飛んでいる。

しゃもじに味噌を入れて、右手には菜箸を持ったままで後ろ向きに出てくる。

あきらら なんでした？

鈴木 あ、なんか切れてた。

あきらら あ、そうですか。

鈴木 何、なんか待ってんの？

あきらら ええ、ちよつと。

鈴木 ふーん。

あきらら まだ食欲ありますか？

鈴木 あ(ト、お腹を押さえて) そんなでもないです。

あきらら やっぱり(しゃもじの中の味噌を見せて) どうしますか、溶いちゃいますか？

鈴木 いや、もう少しあとにします。すいません。

あきらら いいんです。慣れてますから。

郭公の声。

あきらら あ、郭公。

鈴木 (上空を見上げて耳を澄ます)。

あきらら (去りつつ) もとめえ、鍋の火、止めてえ。

郭公の声。

鈴木 早いんですねえ(ト、傍らの本を眺めつつ) それは薄い萌葱色をしてい

る二十五センチと十五センチのバランスのとれた長さを持ち、厚さは二センチ五ミリ、背の外側に飛び出た曲線と内側の凹んだ曲線がほぼ同じ形を作っている。背の丸みは想像の域を出ないが、その堅牢な作り方から考えると、*その想像は容易である。表紙部分には銀色で円、六種類の四角が存在するが、それは決して現代的な意匠ではない。葉は焦げ茶で、先端部分がほつれているところを見ると、おそらく造本

後三十年は経過しているのではないだろうか。

*あきらら、お盆に抹茶を載せて鈴木の後ろ姿をしばらく見ている。

あきらら お抹茶です(ト、座卓にお茶を置く)。

鈴木 はい。

あきらら 訓練ですか。

鈴木 ま、何かあるかわかりませんから。

あきらら 林檎でもむきますか？

鈴木 あ、いいですね。

あきらら 今日はお通じありそうですね？

鈴木 ええ、さっきの猫の喧嘩がよかったです。

あきらら (双眼鏡を外を見る)。

鈴木 まだいますか？

あきらら 忠太郎はまだいますね。

鈴木 どうやって？

あきらら 裸のマハみたいな格好でいます。

鈴木 ああ、猫がよくやる。

あきらら いや、着衣かな。

鈴木 やっぱり猫ですから*裸でしょう。

*もとめ、出てくる。

もとめ 大根、どうする？

あきらら タッパーに入れてこようか。

鈴木 トイレへ行きます(ト、立とうとして少しヨロける)。

あきらら *(手を貸して) 大丈夫ですか。

もとめ *あ(ト、一歩踏み出して止まる)。

鈴木 大丈夫、大丈夫。あ、せっかくの炊きたてご飯だからいただきます。

あきらら すいません、病人の我が儘ですけど。

鈴木 わかりました。

あきらら もう下準備は出来てるんですよ。

鈴木 はい。

鈴木 最近、正岡子規を読んでるんです。

あきらら そうみたいです。

鈴木 知ってましたか。
あきら ええ。
鈴木 あの悲惨なまでの食欲です。
あきら はい。
鈴木 じゃ、お願いします。

郭公が鳴く。
鈴木、ゆつくりと上手へ。
あきら、立ち上がり上手の上空を見上げる。
もとめ、あきらの隣に立つ。

もとめ もう、温めればいいだけになってんだ。
あきら そ。
もとめ 正岡子規って、俳句の人？
あきら ずっと食べて死んでった人。
もとめ 食べて。
あきら ココア三杯、カステラ二切れ、柿十個、菓子パン七つ、温飯（ヌクメシ）三杯、いわし三尾、煎餅三枚、潮汁二碗。
もとめ 何、それ。
あきら そうやって、食べたものを延々と書いてるの。句作と脊椎カリエスの合間に。
もとめ それって、一食分？
あきら そう。
もとめ 姉さんさ、今日の献立ってもしかしたらそんな中のどれか？
あきら そ、読みさしのページのやつ。
もとめ へー。

郭公が鳴く。

あきら *郭公って託卵するんだよね、確か。
もとめ 何、託卵って。
あきら 他の鳥の巣に卵を産んで、育てて貰うの。
もとめ そんなことできるの？
あきら うん。
もとめ その後、親鳥は何してんの？

- 33 -

あきら さあ、忙しいんでしょ、何かと。
もとめ 野生の鳥が忙しい。
あきら うん。
もとめ なんだ、今鳴いてる連中はみんな親を知らないのか。
あきら そう。
もとめ 京都、どうだった？
あきら 佐々木さん。
もとめ うん。
あきら 綺麗な人だったよ。

郭公が鳴く。

もとめ そうか、綺麗だったのか。
あきら さっぱりして、裏表がない人みたいだった。
もとめ あたしも行った方がいいかな。
あきら 会いたいんなら。
もとめ . . .
あきら 預金通帳と判子、預かってきた。
もとめ 何、それ。
あきら お父さんが持ってた全財産。
もとめ へえ。
あきら 六万七千八百円。お葬式にかかった費用はいただいたって。
もとめ 当然よね。
あきら いる？
もとめ 記念になんか買おうよ。
あきら 記念ってなんの記念？
もとめ 晴れて孤児になりました記念。
あきら あたしがいるでしょ。
もとめ だって、いつ何があるかわかんないでしょ。
あきら そうか（ト、双眼鏡を覗く）。
もとめ 何、見てんの？
あきら 郭公。
もとめ 嘘だ。
あきら 杉の木、葉っぱの赤い部分って、風の通り道だって知ってた？
もとめ うん、聞いたことある。

- 34 -

あきら 寒かった通り道。
もとめ 姉さんはお父さんの記憶ってある？
あきら 少しね。
もとめ いくつだったっけ。
あきら 小学校の二年。

間

もとめ 鈴木さん、似てたの？
あきら どうだろ。
もとめ . . .
あきら でも匂い。
もとめ そう、匂い。
あきら *え？
もとめ *あたしは生まれたばかりだもんなあ。
あきら . . .
もとめ 作るしかないんだよね、結局。
あきら 何、作るって。
もとめ お父さんをさ。
あきら . . .
もとめ 適当に欠点なんかもまぶしてさ。
あきら (双眼鏡をのぞいている)。
もとめ 佐々木さん、何してるの？今。
あきら どのかの老人ホームの賄いしてるみたい。
もとめ なんだ、私たちと同じか。
あきら こんなに老人の世話してる人が増えちゃって、世の中どうなるんだろ
うね。
もとめ 最後はみんなで助け合うんですよ。
あきら おお、美しい。
もとめ 殺し合いかもね。
あきら お、忠太郎、立ち上がりました。
もとめ 耳、大丈夫？
あきら 顔面が鮮血で真っ赤であります。
もとめ あらら。
あきら 今しも左によろけつつ、懸命に体勢を立て直しているところでありま

- 35 -

もとめ す。
あきら 立て直す . . . ってさ、忠太郎、なんで、誰に、見栄張ってんのかな。
もとめ それは、動物としての矜持ですよ。
あきら 矜持？
もとめ いつ死んでも醜くならないように。
あきら 死んじゃったら醜いも綺麗もないんじゃない？
あきら 死は他人の記憶にしかないから。
もとめ . . . そうね。
あきら . . .
もとめ 鈴木先生、あとどれくらいなの？
あきら 病院、行かないからね。
もとめ 今は言えない？
あきら 人の命だもん。
もとめ そうよね。
あきら 今、死なれて悔いが残らないんだったら、今死んだっていいはずだから。
もとめ 姉さん。
あきら 何？
もとめ そう思ったことある？
あきら あるよ。あんたは。
もとめ ある。
あきら いっそ死んじやえば良かったのに。
もとめ 姉さんも。
郭公が鳴く。
潮騒。
もとめ 並べちゃおうか。
あきら そうね。
もとめ 食器は？洗ってあるの。
あきら 勿論。
もとめ あ、卵、拾ってきたから。
あきら ありがとう。

二人、下手へ去る。

- 36 -

誰もいない部屋に桜か梅の花が二、三枚舞い降りる。

ウグイスの声。

二人、様々な器を持ってくる。

あきら 菓子パンは今朝出来たやつ？

もとめ うん、昨日の夜に電話しておいた。

あきら さすが。

もとめ なんとたつて焼きたてだから。

あきら お醤油、足した？

もとめ うん。

あきら あたし、ちよつとトイレ覗いて行くから。

もとめ うん。

あきら その牛乳、瓶のヤツ？

もとめ そう。これが今日の第一食？

あきら 朝はずつと吐いてました。

もとめ 大丈夫ですかね、無理に食べさせて。

あきら 食べられるうちは食べるの。生物なんだから。

もとめ 生物。

あきら 病院に行つてないんだから仕方ない。

もとめ 無理にでも行かせちゃえばいいのに。

あきら あんた、説得する？

もとめ あたしは、いいけど（ト、ポケットから向日葵の種を出して庭にま

く）。

あきら 何してんの？

もとめ 向日葵の種。

あきら なんだ。

あきらが上手へ、もとめが下手へ去る。

潮騒が二〇秒続く。

もとめ、下手から入ってくる。

内線電話が鳴る。

- 37 -

もとめ （受話器を取って）はい、どうした？

間

もとめ え、姉さん落ち着いてよ！

間

もとめ

うん、で、飛び降りたの？だから、だから、わたしは何すればいいわけ？・・・で、姉さんは何してるの？今・・・走ってる！・・・うん、うん、今行く！

もとめ、子機を持ったままで靴を履いて出て行く。

ウグイスが鳴く。

鈴木が上手から出てくる。

鈴木

（出てきながら）なんかあったんですか？勝ちました。三〇センチの一本グソです・・・って、いないのか。なんだ。（ト、座卓の上にある食器と食べ物を見る）お腹が空きました。あきらさん・・・もとめさん。

ウグイスの声。

鈴木

おまえさんじゃなくてさ・・・お、今年の最初か・・・（ト、座卓の前に座って）綺麗なものを見つけたらもう少しと思えます。子どもの頃から死ぬということに憧れていたのかも知れません。この、ここにあるこのものがある日まったく無くなる。そして、その無くなってしまったことに私は気づかない。そのことが怖かった。ある画家が家の玄関口に「忘れるな、死はお前が生まれたときから始まっている」と掲げていたそうです。ああ、毎日それを見ながら暮らしていたんだろ。な、日々新たな死が始まるんだなあ・・・と思いつつ、なんだ慣れるってことか、そんなこともあったのかと、ふと振り返ることかと・・・ああ、私がいたことなんか誰も思い出さない。私も振り返ることできない。はは、そんな当たり前なこと。

- 38 -

ずっと遠くでサイレンの音。

鈴 木 当たり前なのか。・・・子どもの頃によく頭によってきて、離れない光景があります。透明に青く澄んだ湖があつて、私は湖にするりと入り、底の方に潜っていきます。太陽の光は青い水を切り裂いて、水底まで届き、私はその中をゆっくりと湖底に沈んでいきます。このままだと死んじゃうよなと思ひながらも不思議と苦しくはありません。やがて、体は湖の底にふんわりと着地します。ああ、ここにずっといるんだとはるか上にある水面に乱反射する光を見てみると。体がゆっくりと動いていきます。え、また動くのか、ここが終わりじゃないんだなと覚悟を決めて、体の下を流れていく水に身を任せていくと、突然湖の中の湖のへりに投げ出されます。私はその湖にまたゆっくりと落ちていくんです。あー、光はどこまで続くんだらうって思ひながら・・・

サイレンが下手から近づいてきて、家を通り、上手へ去って行く。もとめ、あきら、上手から出てくる。

もとめ あ、いたんですか。

あきら どうでした？

鈴 木 私はまだ大丈夫だよ。

もとめ *え？

あきら *え？

鈴 木 え？

あきら ああ、やっぱりさっきの死にそうなおじさんが119番通報をしてから飛び降りたらしいんですよ。

鈴 木 (身乗り出して)で?どうした?

あきら (家の上がりつつ)なんか木にひっかかっているみたいです。

もとめ (家の上がりつつ)いや、自分で掴んだんじゃないかな。

あきら ああ、きつとそうね。

もとめ だって通報してからだもんね。

あきら そうそう。

鈴 木 なんだ。

あきら で、どうでした?お通じは。

鈴 木 うん、勝ったよ。

あきら それはおめでとうございます。今すぐ支度します。

もとめ 最近なんか冷たくない?

あきら そうかな。

もとめ 言葉尻がなんか尖ってる感じがする。

あきら そんなことないわよ。

もとめが持っている電話が鳴る。

あきら、そのまま下手へ去る。

もとめ あ、えと、鈴木です。はい・・・今ですか(ト、鈴木顔をみる)。

鈴 木 (手を振る)。

もとめ さっきまでいたんですけど、崖から身を投げた人がいます・・・

え?・・・いえ、鈴木は身を投げてません、生きてます。

鈴 木 (背く)。

もとめ はい、はい、あれでしたら、こちらから電話させますが・・・ああ、そうですか後ほどですね、わかりました。そう伝えます。失礼ごめん

ください。

鈴 木 誰?

もとめ 齋藤さんって方です。

鈴 木 ああ。

もとめ 締め切りが過ぎてるそうです。

鈴 木 はいはい。

あきら、お盆に様々な料理を載せて下手から出てくる。

もとめ あ、手伝う。

あきら そこ拭いて。

もとめ (お盆から台拭きをとって素早く座卓を拭く)。

鈴 木 お、本格的だな。

あきら いっぱい食べて貰いますから。

鈴 木 卵焼きの黄色がいいね。

あきら もとめが坂の下の農家で拾ってくるんです。

鈴 木 拾う?

もとめ 庭に放し飼いの鶏がいるんですよ。

あきら え、放し飼いなのか？
もとめ だから、あっちこちの草むらから探すの大変なんだから。
あきら へー。
鈴木 ご苦労様です。
もとめ あたしもテンペラ描くのに使ってただけだよ。
あきら いいわね。
もとめ 探すの大変だからってお金受け取ってくれないんですよ。
あきら あら。
もとめ 代わりに菓子パン置いてくるんだけどね。
あきら (立って味噌汁を取りに行きつつ) へー、物々交換か。

小さく遠くでウグイスが鳴く。

もとめ ここにもいるんですね、ウグイス。
鈴木 うん。
もとめ ここまで来ますかね。
鈴木 ここには来ないよ。
もとめ 向日葵の種、蒔いてるんですけどね。
鈴木 あいつらは裏山の谷間をテリトリーにしていますからね。
もとめ 谷間？
鈴木 谷間に一羽しかいないんですよ。だから今のヤツは向こうから飛んできてるんです。
もとめ へー。
鈴木 大体十五か十六くらいかな。
もとめ 何がですか？
鈴木 ここで聞こえる鳥の声。ちょうど巣作りの季節だから、これからもつと来ます。
もとめ どうしてですか？
鈴木 ま、求愛と威嚇です。
もとめ 求愛と威嚇はセットですか。
鈴木 そうなります。

あきら、味噌汁を運んでくる。
ここからあきらともとめは様々な作業をしながら。
鈴木は適当な所で「いただきます」と言って食べ始める。

- 41 -

あきら 求愛と威嚇ってなんですか。
もとめ 姉さん知ってた？ウグイスってね、一つの谷に一羽しかいないって。
あきら うん。
もとめ 本当？
あきら 知り合いでね好きな人がいるの、ウグイスが。
もとめ 誰？
あきら 知らないかな中畑さん。
もとめ 中畑さんって、あのおじさん？
あきら そう。
もとめ まだ生きてるの？
あきら ちゃんとね。
もとめ いつつも真つ赤な野球帽かぶってるおじさんでしょ。
あきら うん、今頃になると、寝袋持って山に入るのよ。
もとめ なんて。
あきら ウグイスがどこに巣をかけるか探すため。
もとめ うん。
あきら 探し当てると、雛が孵るまでじっと待つわけ。
もとめ うん。
あきら そんなで、雛が孵って、親鳥がいなくなった隙に、素早く雌雄の判断をして、雄だけ持ち帰るの。
もとめ 雄だけ？
あきら だって、啼くのは雄だけでしょ。
もとめ え、そうなの？
あきら そうなの。
もとめ 知らなかった。
あきら でも雛って小さいから、慣れてても雌雄間違っちゃうことある訳ね。
もとめ うん。
あきら 雛が大きくなって、雌が紛れ込んでた時どうするかわかる？
もとめ (首を振る)。
あきら また巢に返しに行くの。
もとめ そこまでやるか。
あきら やるのよ、そこまで。
鈴木 好きなんですわね。
あきら なんか、中国の老人たちって凄いなってね。
もとめ へー。

- 42 -

あきら 貴重な小鳥のために莫大なお金をつぎ込むんだって。
もとめ なんの意味があるのかな。
あきら 意味なんかないんじゃない。
もとめ ない？
あきら 好きなことって、説明できた瞬間に好きじゃなくならない？
もとめ そうかな。
あきら (鈴木に) お茶入れましょうか？
鈴木 いや、まだ。
もとめ 小鳥を見るの？啼かせるの？
あきら どっちなんだらうねえ。
鈴木 それは啼かせる方ですよ。
もとめ そうですかね。
鈴木 最初の一声で終わりなんですよ、たぶん。
もとめ 終わりって？
鈴木 小鳥との関係。
もとめ じゃあ、また別の小鳥に興味に移るんですか？
鈴木 ええ。
もとめ 別の。
鈴木 ……
あきら なんか、人の欲望って果てしないです。
鈴木 それが、嫌なんです。
もとめ え？
鈴木 いつまでも終わらないのが。
もとめ 終わりたいんですか？
鈴木 ええ、無責任に。
もとめ 卑怯ですね。
鈴木 (とぼけて) 中国の老人たちの秘密って、奥が深いんですよ。
あきら *纏足だもんね。
もとめ *最後の声か。
鈴木 ああ。
あきら *はい。
もとめ *はい。
鈴木 ちよつと醤油いただけますか。
あきら あ、はい。
もとめ 佐々木さん、これからどうすんのかなあ。

- 43 -

あきら 一人で生きていくでしょ。
もとめ 一人でね。
あきら そういうの選んだんだからしょうがないよ。
もとめ 会ってみようかな、わたしも。
あきら あとで電話番号教えるよ。
もとめ うん。
あきら わりと気が合うかも知れないもとめとは。
もとめ そう？
あきら さばけてる人だから。
もとめ それじゃあ姉さんとも合うよね。
あきら いっそのこと三人で一緒に暮らそうか、ここで。
もとめ いいかも。
鈴木 何の話ですか。
あきら 先月、父が亡くなったんです。
鈴木 そうだったんですか。
あきら それで、後始末なんかで、向こうの人と会ったんですよ。
鈴木 ああ、例の駆け落ちした人。
あきら ええ。
鈴木 どんな人なんですか？
あきら 五〇を少し過ぎた方で、まだ、バリバリ現役の人です。
鈴木 どんな気分でお会いしたんですか？
あきら ま、ちよつとした知り合いに会うようなもんです。
もとめ 緊張した？
あきら そりゃ緊張するわよ。
もとめ だよね。
鈴木 ずっとお会いしないでいたわけですよね。
あきら 会う理由がなかっただけです。
鈴木 敵ですか。
あきら もうそんな感じじゃないです。
鈴木 ……
もとめ わたしは全然覚えてないんです。生まれたばかりでしたから。
鈴木 はい。
もとめ 姉さんが十才の時。
あきら 覚えてます、最後の言葉。
もとめ 何、それ。

- 44 -

あきら お父さんが家を出て行く時に、私に言った言葉。
もとめ なんて言ったの？

あきら じゃあな。

もとめ それだけ？

あきら うん、じゃあな。それだけ。

もとめ そんなもんかもね。そんな時、姉さんは何してたの？

あきら 消しゴムで字を消してた。

もとめ 消しゴム。

あきら だから今でも消しゴム関係がちょっと苦手なんだ。

鈴木 それは、朝でしたか？

あきら え？

鈴木 お父様が出て行ったのは。

あきら えーと・・・覚えてないです。

鈴木 そうですか。

電話が鳴る。

鈴木 私ならいけません。散歩に出ました。

あきら (子機を取って) はい、鈴木です。すいません、先生はいましがた散歩に出られました。こちらから電話をかけさせましょうか・・・それではお電話番号いただけますか？・・・はい、承知いたしました。では、ごめん下さい(ト、子機を置き)電話・・・。

45 -

鈴木 (首を振る)。

もとめ (立って、向日葵の種を庭に蒔く)。

あきら (立って、もとめの隣に立ち空を見上げて、息を吸い)大丈夫そうね、今日は。

もとめ あの林檎、何？松の木にぶら下がってるヤツ。

鈴木 鳥の餌です。あきらさんにやって貰いました。

もとめ なんでぶら下がってるんですか？

鈴木 ああしておく、地面に転がらないんですよ、だから汚くならない。

もとめ なるほど。

あきら お味噌汁まだありますけど。

鈴木 いや、一杯で十分です。

あきら はい(ト、もとめ)形見貰ってきたんだけど、どうする？

もとめ 何？

あきら ライターとラジオと本。

もとめ ラジオ？

あきら 毎日使ってたんだって。

もとめ ふーん。

鈴木 ラジオを使う・・・いいですね。

あきら そんなに必要ないんだと思うよ、年取ると。

鈴木 おいくつだったんですか？

あきら 七十五です。

鈴木 ほう。

あきら 駆け落ちしたのが五十四の時ですから。

鈴木 三十、違ってた訳ですか。

あきら そのくらいですね。

もとめ なんてだったんだらう。

あきら もとめが言うか。

鈴木 なんにでも個人的事情ってのはあります。

あきら クソがつくくらい真面目な人だったらいいんですよ、定年前までは。

鈴木 何をなさってたんですか？

あきら 図書館司書です。

鈴木 図書館司書。

あきら 県立図書館の。

鈴木 ああ、それで。

あきら ああつて？

鈴木 いや、本に埋もれてる生活していると、毎日出勤するたびに世界を取り替える訳ですから。

あきら 地味な仕事だったらしいんですけどね。

鈴木 真の熱狂は沈黙のうちにあります。

もとめ え？

鈴木 このパン、中がまだあったかいですね。

もとめ 焼きたてなんですよ。

鈴木 それはどうも。

鈴木 鈴木さん。

鈴木 はい。

もとめ 意見をひとつ述べてもいいでしょうか。

鈴木 どうぞ。

鈴木さん、ここに布団を敷いておやすみになりますよね。

鈴木 ええ。
もとめ 寝室があるのにここに布団敷くのって大変かなって、姉さんが言いくそうだから。

鈴木 ここが一番日当たりがいいんですよ。
もとめ まあ、そうですね。

鈴木 それに、もうすぐ死にますから。
もとめ ……

鈴木 足はもう全然なんですよ。気張って歩いてはいますけどね、最近寝ると今日はどこに痺れがくるんだろう、明日の朝はどこが動かないんだらうって。

もとめ …… すいません。
鈴木 でも全然そうは見えないでしょ。食欲だってこんなにあるんだし、人一倍脱糞なんかもしますからね。今日も三十センチのをひりだしました。でも私の中の虫みたいなものがいつ心臓に来るのかはわからないわけですから。今からかもしれないし、三年先かもしれない。一人であるときなんか、ちよつと死んだふりしてみんなです。でも、どうも緊迫感がなくてね、たぶん、ちゃんと死んでいないからだと思うんですけどね。死ぬっていう現実を生きていけないのを最近悔やんでいます。…ああ、でもあれです。寝床の中にいて、ずっと潮騒を聞いていると、福々しさが昇ってくることはありません。

もとめ …… お湯を沸かしてきます。

もとめ …… お湯を沸かして出て行く。

あきら 虫ってなんですか？

鈴木 完全に動かなくなる前に、体の中でムクムク動くんですよ、虫みたいなのが。

あきら その虫はなんていう虫なんですかね。
鈴木 さあ、なんでしょう。

あきら 痛いんですか？

鈴木 別に痛くはありません。むしろ、痒いですね。
あきら 痒いんですか？

鈴木 すいません。もとめさんにあんなこと言ってます。
あきら いえ、いいんです。

鈴木 今日はいもう左手の小指が動いてません。二、三日前から痒かったんで

すが。
あきら そうなんですか。
鈴木 後で、お酒少しいいですかね。
あきら ……

鈴木 これだけ食べるんですから、少しくらいいいじゃないですか。
あきら はい、升に一杯くらいなら。

鈴木 昼間っからですよ。
あきら 昔よくいたじやないですか、何やってんのかよくわからないのに小さ

つぶりしてて、貧乏してなくて、いっつも風呂上がりにみたく感じだ屋間っからエヘエへしてた人。
鈴木 ああいうのが理想ですね。働かないでそこそこメシが食えて、たまにお酒なんか飲んで、プロ野球と女にしか興味がなく、無責任だけどそんなに嫌われないって、いませんかね。もう今は、そんな人。

あきら …… すいません。
鈴木 …… すいません。

もとめ …… 鉄瓶と郵便物を持ってくる。

あきら (もとめから鉄瓶を貰って、湯冷ましに湯を入れる)。

もとめ 郵便物です。
鈴木 あ、捨てちゃってください。

もとめ はい(ト、ゴミ箱に入れる)。
鈴木 今日第二食は何にしますか？

もとめ これがたつぶりだから蕎麦なんかどうですか。
鈴木 いいですね、天麩羅も付けてください。

鈴木 はい。
もとめ タラの芽なんかいいな。

鈴木 あ、買ってきます。
あきら すいません。

鈴木 つゆは温かいのですか、冷たいのですか？
あきら 両方、いいですか。

鈴木 はい。

遠くでウグイスが啼く。

もとめ (上手の橋掛かりまで行って) 五月ってなんでこんなに綺麗なんでしょうね。

鈴木 六月を待ってるからです。

もとめ え？

鈴木 待っていると、綺麗になるんです。

もとめ ……えと、氷水につけるんだよね、姉さん。

あきら 何？

もとめ 天麩羅。

あきら そう。

鈴木 ウグイスの声、響いてましたね。雨が来るかな。

あきら (立って、もとめの隣に行き) え、そうですか？

鈴木 もうすぐ電車の音も聞こえてきますよ。そうしたら雨です。

あきら こんなに晴れてるののですか。

もとめ 電車って、坂の下のですね。

鈴木 そう。

もとめ 来ますかねえ。

鈴木 すいません、二度目です。

あきら、もとめ、鈴木に手を貸す。

鈴木 今年はまだ不如帰の声が聞こえませんか。

あきら そうですね。

鈴木 子規みたいにいっぱい。

あきら あとでカステラ切ります。

鈴木 あ、渋めの煎茶にしてください。

鈴木、上手へ去る。

もとめ 昨日も帰ってくるの遅かったでしょ。

あきら 少しね。

もとめ 毎日毎日、あんなに遅くまで何してんの？

あきら 死んでる人見つけて驚く練習してんの。

もとめ ……

あきら 冗談よ。さ、かたしちやおうか。

もとめ うん。

二人、作業しながら。

もとめ 金って、後ろに下がる？

あきら 下がれる。

もとめ 銀っていうのは左右には行けないのよね。

あきら そう。

もとめ 飛車角は成金になったら王様プラス飛車角よね。

あきら そう。

もとめ あと、なんだっけ。

あきら 歩を置いての詰めの王手はできない。

もとめ なんだっけ、それ。

あきら だから、手持ちの歩で最後の詰めの王手はできないの。

もとめ 攻めてつたらできないの？

あきら 攻めることができればね。

もとめ 大丈夫、鈴木さん弱いから。

あきら またやってんの最近。

もとめ 将棋だけじゃなくて、トランプとかウノとか。

あきら ウノ？何それ。

もとめ なあんにも考えなくていいゲーム。

あきら ふーん。

もとめ 後でしようか？

あきら うん、教えて。

もとめ ドミノより単純だから。

あきら ドミノって、倒すやつ？

もとめ 姉さん、ドミノ知らないの？

あきら 知らない。

もとめ それも今度教えてあげる。鈴木さん喜んでたから。

あきら 雨が来るかな。

もとめ 来るかな。

間
下手へ出たり入ったりしながら、ここで去る。
遠くで電車の音。
バケツに水を入れて持ってくるあきらともとめ。

二人、きつく絞った雑巾で床を橋掛かりから拭き始める。

もとめ 冷たい水とちやぼちやぼ卵。

あきら

もとめ 冷たい水とちやぼちやぼ卵。

あきら 何、それ。

もとめ なんかも卵溶いてる時ってこんな音しない？

あきら ちやぼちやぼ？

もとめ うん。

あきら どうしたの？

もとめ 別にどうもしない。

あきら 変な人。

もとめ 少しづつ死んでいくってどんな感じなんだろうね。

あきら 死ぬなんて*ずっと考えたことなかったもんなあ。

あきら *大なる悲観は大なる楽観に同じ。

もとめ え？

あきら さ、働こ。

もとめ

あきら 働いてると、余計なこと考えなくてもすむからね。

もとめ 姉さん、鈴木さんと寝たことないでしょ。

間

二人、無言で雑巾をかける。

あきら 枕カバー、安いの見つけた。

もとめ へー、どこで。

あきら 前田の布団屋さん。

もとめ いくら？

あきら 三つセットで五百八十円。

もとめ ちゃんと綿だった？

あきら うん、エジプト綿。

二人、無言で雑巾をかける。

もとめ エジプト綿ってさ、偉いの？

間

もとめ 落ち着いてるね、鈴木さん。

あきら あんた、今日なんで来たの？

もとめ 自転車。

あきら あのママチャリまだ動くの？

もとめ 動くよ、立派に。

あきら 免許取りなさい。車貸してあげるから。

もとめ うーん あたしは自転車がいい。

あきら なんて、絵なんか運ぶの便利じゃない。

もとめ 嫌なの？あたしがお願ひするの。

あきら そうじゃないけどさ。

もとめ あたしは姉さんの助手席が好き。

あきら あ、父さんの形見、見る？

もとめ うん、見たい。

あきら (いきなり車の鍵をもとめに投げる、相当早いスピード)。

もとめ (しつかりと受け取る)。

あきら 車から鞆、取ってきて。

もとめ うん。

もとめ、下手へ出て行く。

あきら、雑巾で床を拭く。

一瞬、この家の上空を黒い雲が横切る。

あきら、布団の形に歩いてみる。

もとめ、鞆を持って入ってくる。

あきら あ、帰ってきた。

もとめ なんで？

あきら 帰ってこないと思ってたから。

もとめ 何、いきなり崖から身を投げるって。

あきら うん。

もとめ なわけありませんよ。はい(ト、鞆をあきらに渡す)。

あきら (受け取って、靴から本を出す) ほら。

もとめ (本を受け取って) へー。

あきら アンタの誕生日、出てくるよ。

もとめ 何、それ。

あきら 父さんの書き込みがあるんですよ。

もとめ 書き込み？

あきら もとめ、生まれるってあったもの。

もとめ 嘘。

あきら ほんとほんと。

もとめ、椅子に座って本を開く。

鈴木、入ってくる。

あきら (鈴木を支えに立ち上がる) まだ召し上がりますか？

鈴木 ええ、もう果物くらいでいいです。

あきら おいしい生カステラがあるんですけど。

鈴木 いいですね。

あきら あたしたちも、いいですか。

鈴木 勿論です。

あきら もとめ、下げていいって。

もとめ うん(ト、本を椅子に置いて片付け始める)。

間

鈴木にだけバックサスが当たる。その周りで、二人ゆっくりと食器を下げて、ティーポット、紅茶茶碗、生カステラの皿を三人分、セツトする。

鈴木 食べる、片付ける、食べる、片付ける。その繰り返しが生きていることで、私はそれをずっとやってきた。ほんのたまには詩的な震えもやってきたけれど、そんなもの、食べて、片付けることに比べたら何ほどのこともない。朝ご飯にまさる食事はなくて、食欲に勝る調味料は存在しない。海苔と梅干し、魚と豆腐、お茶とこはんと少しの梅干し。それが食べられなくなることが悲しいです。自分をなくしてもいいほどの欲望はもうありません。病気は私の一部です。だから、これから私の

- 53 -

中に出てくる病気は切りません。女も私の一部でした、だから切ることはできません。ただ、静かに退場するのみです。もしも、私が理由で、五月の笑顔がないのだったら。

暗闇の中で動いていたあきらともとめが椅子に座っている。

あきらともとめにだけ薄い光が降りている。

鈴木はそのハレーションの中で煙草を吹かしている。

あきら あるでしょ、後ろの方。

もとめ あったあった。

あきら 七月三日、もとめ生まれるって、あたし二十五日よ誕生日。

もとめ そうよね。

あきら それじゃあホントは三日なの？あたしの誕生日。

もとめ ま、誰だって自分が生まれた日付なんて覚えてないからね。

あきら そーだけどこ。

あきら でも三日と二十五日だったら、今までの星占いとかってなんだったんだらうね。

もとめ 損した気分だな、なんか。

あきら ま、第二の人生が始まるんだって諦めるんですね。

地明かりが戻ってくる。

鈴木 うまそうですね、これ。

あきら 最近流行ってるんですよ、生カステラ。

鈴木 生のカステラですか。

あきら 正確には生焼けのカステラかな。

もとめ 完成一步手前がいいんですよ。髪を切ってる時みたいに。

あきら ああ、わかるわかる。

鈴木 (下手側の縁側まで這ってきて) これからあっちの田んぼに水が入ったら、ここは海の真ん中にそりたつてる岬になりますね。

もとめ (本を椅子に置いて、鈴木の隣に行く) そしたらまた寒くなります。

あきら (本を取り上げて見る)

鈴木 田圃に水が入ったら海ですね。

もとめ ええ。

- 54 -

鈴木 所したらここは陸の孤島ですね。

もともめ 空を映す波のない海ってなかなかありませんよ。

鈴木 (肯く)。

もともめ 海の中を走っていく電車も。

鈴木 (肯く)。

もともめ 鈴木さん、見たことありますか？

鈴木 いや、ないですね。

もともめ お日様の具合と、見る角度で空が見える田圃があるんです。

鈴木 このあたりにですか？

もともめ ええ、そこを発見してから毎年五月になるのが楽しみなんです。

鈴木 行ってみたいな。

もともめ 季節を感じない街には五月は似合いません。

鈴木 雨がきますね。

もともめ 鈴木さん、雨が降るって根拠は電車の音が遠くから聞こえるってだけですか？

鈴木 そうです。

もともめ 賭けましょうか。

鈴木 いいですよ。

もともめ 何を賭けます。

鈴木 なんでもいいです。

もともめ じゃあ、天麩羅を揚げる前までに雨が降らなかつたら、今度一緒にドライブに行きましょう。

あきら (もともめを見る)。

もともめ 姉さんの車で。

鈴木 いいですよ。

もともめ (あきらに) お弁当作って行こうよ。

鈴木 . . .

あきら (本を読んで少し笑う)。

もともめ なに？

あきら 同じだなあ、鈴木さんと。

もともめ (這ったままであきらに近寄って) だから、何よ。

あきら この書き込み。ウズラのゆで卵、ウインナー、ハンバーグだって小学

生みたい。

もともめ なになに(あきららの隣に来てページをのぞき込む)。

あきら そんな書き込みがいっぱい。

もともめ え？

あきら その日に食べたもの。

もともめ ホントだ。

あきら このページを読んでいた時に食べたもの。

もともめ ハラス、ちりめん、牛蒡、又タ。

あきら インゲン、トマト、薄焼き、焼き味噌。

もともめ 蒲焼き、青菜に、キュウリとレンゲ。レンゲって何？

あきら なんだろ。

もともめ (拗う格好をして) このレンゲ？

あきら わかんないよ。

もともめ ショートケーキ。

あきら 食いしん坊だね。

もともめ ちよつと、なに、これ、調理法？

あきら 米対糠対麴、一対三対七。なんじゃこりや。

もともめ 漬け物かなあ。

あきら さあ。

もともめ カボチャにチクロ投入。美味なり。何？チクロって。

あきら チクロ？知らない。

もともめ なんかの調味料かな。

あきら たぶん。

もともめ 探しに行こうか、今度。

問

鈴木 お取り込み中申し訳ないのですが。

あきら *はい。

もともめ *はい。

鈴木 ここに来た時から不思議だったんですが、そのカヌーはなんであるんですか？

あきら 船をここに置いておくと。

もともめ 船出できないですからね。

あきら ヒバリが上空から舞い降りて来る。

鋭く啼く。

鈴木 来ますよ。
もとめ 何がですか？
鈴木 雨です。
あきら 雨？（ト、立ち上がる）。

あきららの持っている本から向日葵の種が床にパラパラとこぼれる。

どしや降りの雨。

鈴木の死を暗示して、照明がゆっくり落ちていく。
暗転。

雀。

朝の光線。

雨が上がつて、明かりがつくと、中身の入っていない白い器が座卓の上に綺麗に並んでいる。

あきら、もとめ、それぞれ本に紐をかけて運びだそうとしている。
衣装は同じだが、二人とも真っ白な軍手をはめている。

- 57 -

もとめ この辺に自転車屋さんってあったっけ？
あきら 坂に上がる前に踏み切りあるでしょ。
もとめ うん。
あきら その踏切を渡らないで、右っかわへ行けば交差点があるから、自転車屋さんはそこから五十メートルくらい。
もとめ ああ、あそこか。
あきら この街ってわかりにくいよね。
もとめ まだ慣れないなあ。
あきら どうしたの？
もとめ なんかチェーンが一個多いような気がして。
あきら 一個多い？
もとめ うん。
あきら 足してないのに？

もとめ うん。
あきら 伸びたの？
もとめ チェーンがそんなに簡単に伸びるか。
あきら 力が強すぎるんじゃないの？
もとめ どの。
あきら 足。
もとめ ペダル踏み込むたびにワンクッションあるのよ。
あきら なんか嫌だね、それ。
もとめ そうなんだよ。
あきら 棄てちゃえば？
もとめ 嫌だよ。
あきら だってあのママチャリいつ買ったんだっけ。
もとめ 小学校卒業する時。
あきら そんなだけ乗ってあげれば自転車だって本望だよ。
もとめ あのさ、姉さんは車移動だからわかんないだろうけど、ここからの帰りの爽快さって、ちょっと形容できないくらいなんだから。
あきら ふーん。
もとめ わかんないでしょ。
あきら わかんない。
もとめ 運動しなさい、もっと。
あきら はいはい。
もとめ 姉さん、一日に五十歩くらいしか歩いてないでしょ。
あきら もっと歩いてるわよ。
もとめ 歩いてない歩いてない。だってさ、家出て、車に乗るまで二十歩くらいでしょ。ここ着いてこの部屋に来るまで三十歩もないじゃない。
あきら もっとあるよ。
もとめ ないない。
あきら あるって。
もとめ 都会の人を見なさい。みんな田舎の人より歩いてるでしょ。電車乗って階段上り下りして、地下鉄の乗りかえなんかしたら「ほんとにここが同じ駅なのか」って、疑問に思うほど歩くじゃない。姉さん、たまに東京行くとやせない？
あきら そうか。
もとめ でしょ？
あきら 確かに歩くわね。

- 58 -

もとめ 田舎者がダイエツトするのは簡単なんだから。
あきら 東京へ行けばいい。
もとめ そう。
あきら 売れそうもない本どうしようか。
もとめ 棄てる。
あきら 勿体ない。
もとめ 自転車棄てようって人が何言ってるの。
あきら そうね、商売商売。

間

もとめ 姉さんさ、今回ちょっと危なかったでしょ。
あきら なんだよ。
もとめ 本気モード見えてたから。
あきら あんたに言われたくないわ。
もとめ 当たった？
あきら そろそろ炊けましたかね。
もとめ 見てくる。
あきら お願い。

もとめ、下手へ去る。
郭公が鳴く。

あきら 託卵出来たか？君たち。

もとめ、炊飯器と紙袋を持って出てくる。

もとめ (紙袋から不揃いの卵を丼に入れる)。
あきら お金払った？
もとめ ちゃんとね。
あきら (茶碗に湯気の立ったご飯をよそう)。

二人、お椀に卵を割って、とく。
二人、溶き卵をご飯に入れて、食べ始める。

- 59 -

もとめ 美味しいね。
あきら うん。
もとめ 大変だった？
あきら あんたは？
もとめ あたしはそんなに。
あきら ・・・。
もとめ 姉さんは？
あきら 少しづつわたしたちのものになるわけだから。
もとめ 少しづつ？
あきら うん。
もとめ ・・・自分のものになる。
あきら うん。

間

もとめ スウェーデンのどっか北の方にさ、世界シードバンクってのがあ
あきら へー。
もとめ 世界の植物の種を、四十九万種類貯蔵してんだって。
あきら へー。
もとめ あたし、このカメラ見るたんびに思うの。
あきら 何を。
もとめ 一粒づつだったらこれに乗るなって。
あきら おお、箱船ですか。
もとめ あ、二トンのロングしかないって。
あきら 四トンじゃないと入らないよ。
もとめ そうだね。

郭公が啼く。

照明がゆっくり落ちていく。

了

- 60 -